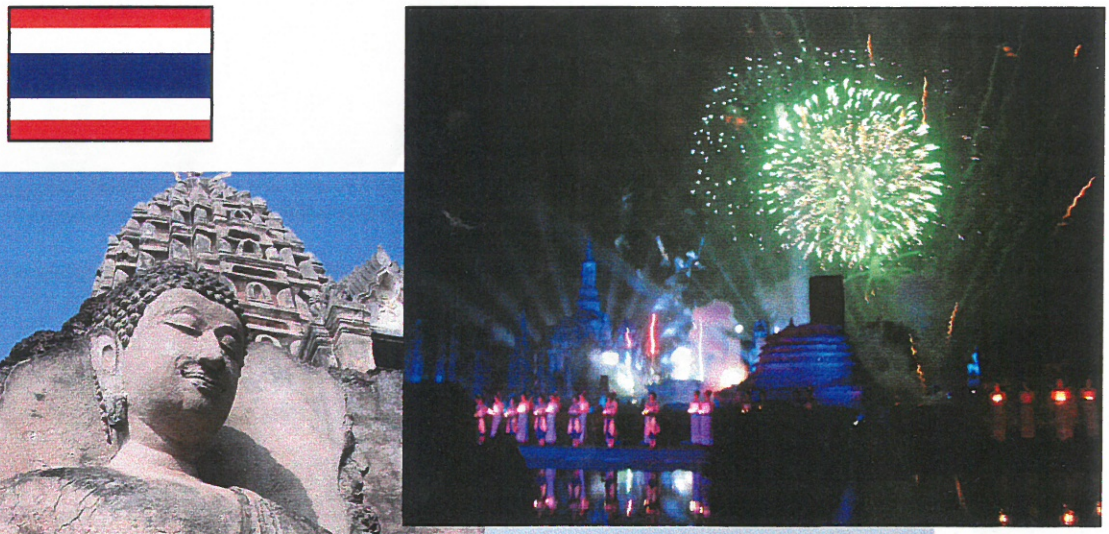
NPO JCP
Japan Conservation Project

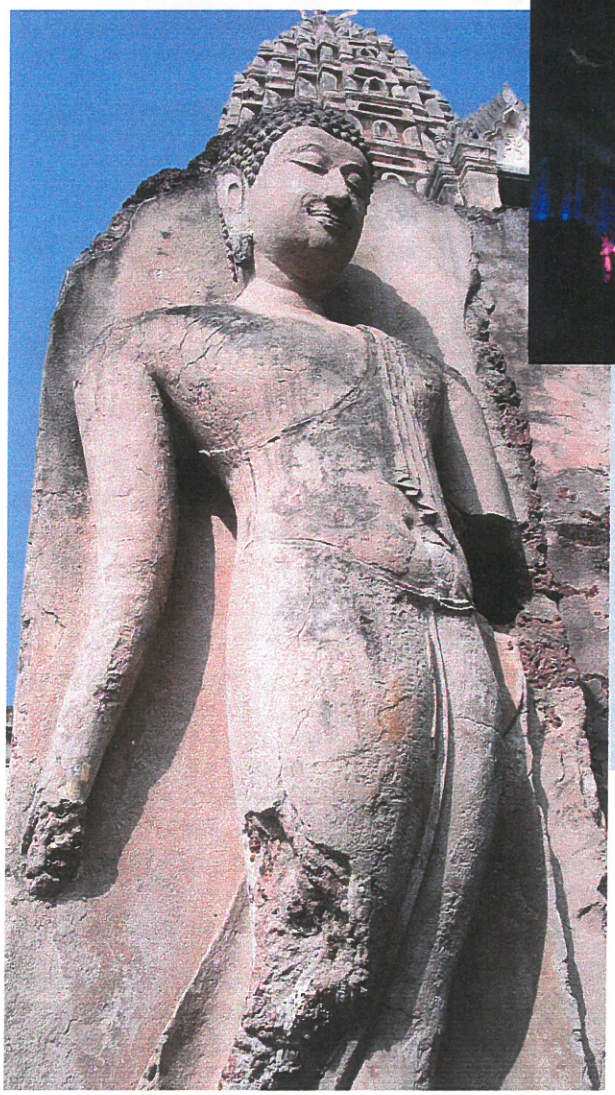
NPO JCP NEWS

No. 15 2007. 1.1

・タイ国・世界遺産遺跡見学スタディツアー
　タイ国・世界遺産スタディツアーに参加して
　タイ・スタディーツアーに参加して
・保存修復の現場から　1000 年の都の中で
・JCP 事務局通信
・書籍紹介『陶磁器の修理うけおいます』



ロイ・クラトンのお祭り



スィー・サッチョナライ　遊行仏

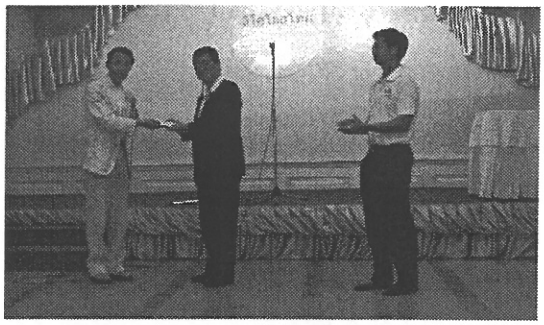
遺跡を舞台にした歴史劇

川に流す灯篭を売る夜店

タイ国・世界遺産遺跡見学スタディツアー

2006年度の海外修復現場見学ツァーは11月1日から6日まで。アユタヤとスコータイの世界遺産で知られるタイ国を訪れました。今年の雨季はいつにも増して雨量が多かったため、バンコクは洪水だとか、クーデターで戒厳令が敷かれているとか、不安材料を抱えての出発でしたが、旅行者はどこ吹く風、折りしも年に一度の国を挙げてのお祭り、ロイ・クラトンのシーズン到来で、飛行機は満杯でした。

参加者は総勢14名。講師、スタッフ含めて18名。引率は去年に引き続き西浦忠輝氏（当機構副理事長／国士舘大学教授）および友田正彦氏（(株)文化財保存計画協会／当機構登録会員）にお願いいたしました。またタイ側では文化省芸術局保存科学部長Chiraporn Aranynark氏、イコモス事務局のVasu Poshyanandana氏に、現地の手配を全て計らっていただき、大変お世話になりました。この場を借りて厚く御礼申し上げます。同行してくださったイコモスのメンバー、先々でもてなしてくださいました博物館のスタッフの暖かい心遣いは忘れることができません。重ねて御礼申し上げます。



バンコクロイヤルホテルにて、タイ国イコモスへ寄付金の贈呈式。左から　西浦忠輝副理事長、タイ国文化省芸術局長Arak Sunghitakul氏、タイ・イコモス事務局Vasu Poshyanandana氏

左から参加者のAndras Morgos筑波大学教授、Arak Sunghitakul氏、タイ国文化省芸術局保存科学部長Chiraporn Aranyanark氏、友田正彦先生

タイ国・世界遺産スタディツアーに参加して

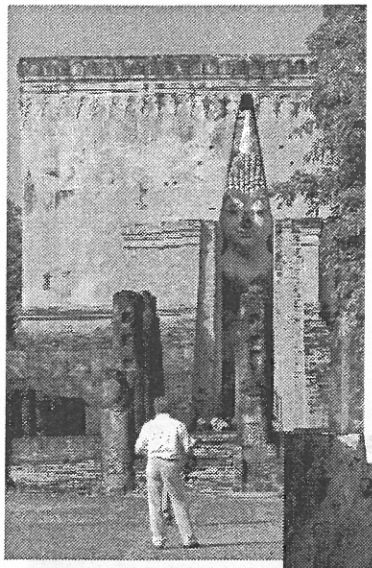
筑波大学大学院芸術研究科世界遺産専攻　篠崎　梢

研究室の掲示板でスタディツアーの案内を一目見て、「行きたいな！　行ってみようかな？」と思ったあの瞬間があったおかげで、今があるんだなと思うと、なんだか不思議な気がします。締め切り直前に初めて問い合わせの連絡をしたにもかかわらず、八木さん、松本さんがご丁寧な対応をしてくださり、ツアー参加を決めました。参加を決めた後も、「知識のない自分でついていけるだろうか」「洪水やらクーデターやら落ち着かないタイへのツアーに、1人で参加して大丈夫だろうか」などと不安になったりしましたが、帰ってきた今、参加して本当に良かった、あの決断は間違っていなかったと確信しています。

ツアーに参加したおかげで、肌で感じ、学んだことがたくさんありました。まず、考えてみれば非常に当たり前のことなのですが「文化財や世界遺産に関わる仕事というのは、本当に様々あるんだな」ということ。文化財保存支援機構というNPO法人を始め、学術機関での研究や公的機関、民間機関で、組織的に活動されている方々のみならず、絵画の修復、彩色の修復、写真の修復、土器の修復……など個人で専門的に活動されている方々が参加されていました。本や論文等でお名前を拝見するばかりだった先生方、様々な分野において活躍をされている方々と実際にお会いし、お話できたことは、本当に有意義な経験となりました。机に向かってばかりいたって文化財の保存はできない、という当然の事実を改めて実感しました。

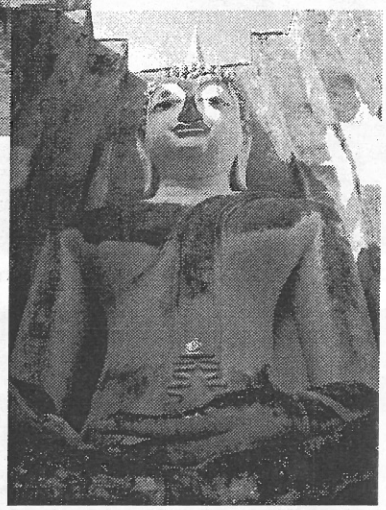
タイの方々の笑顔が優しかったことも忘れられません。タイ国文化省やタイ国イコモスで活躍されているChiraporn さん、Vasuさん、Sopitさん、Sittichaiさん。また各見学地で説明をしてくださった方やホテルや旅行社のスタッフの皆さん。いつも優しい笑顔で対応してくださり、一生懸命私たちとコミュニケーションを取ってくださいました。各見学地では、説明が常に丁寧で誠実で、「どうすれば正しく分かりやすく伝わるか」と配慮してくださいました。一緒の食事はとても楽しく、辛くて苦手だと思っていたトムヤムクンも、大好きになりそうです。

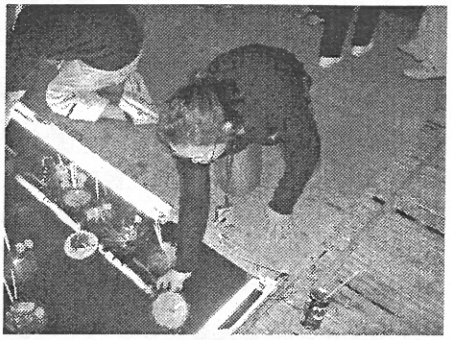
アユタヤ、スィー・サッチャナライ、カンパンペット、スコータイと、どの遺跡も非常に興味深く、「何をどうやって保存するのか」のみならず、「どう公開するのか」「その公開が見る側にどんな影響を及ぼすか」ということについても、1つ1つの遺跡に触れながら考えることができました。地下遺構が洪水の影響を受け、閉鎖になっていたワット・チョム・チェンの考古学遺跡博物館、浸水の影響が如実に現れているサンカロク焼の窯跡などでは、往時をしのばせる姿で公



スコータイ　ワット・スウィー・チュム(Wat sri chum)

ピッサヌロークでのディナー　タイ料理の数々





願いを込めてクラトン（花燈籠）を川に流す。

開することの重要さと、その難しさを改めて突きつけられた気がしました。また、西浦先生が実際に保存処置に携わっておられるスコータイのワット・スィー・チュムでは、保存修復とそれが見る側に与える印象の関係について考えさせられました。西浦先生もおっしゃっておられましたが、仏像の白い顔は見る側を温かく迎える微笑を感じさせます。これが黒く汚れていたら、きっとにらみつけられているような印象を受けただろう、と他の参加者の方とお話をしました。保存修復のための処置を行うことは、単にその文化財だけに影響を及ぼすのではありません。見る人間が持つ印象も変わってくるのだと再確認でき、非常に貴重な経験となりました。保存処置や実験がどうやって行われているのか、そしてそれが何をもたらすのかということを現場で担当者の方から聞くなんて、そうそうできることではありません。このツアーならではだと思いました。

さらに、「どの程度、どういう素材で、どんなふうに修復するのか」ということについてもますます関心を持つようになりました。修復していない遺跡は往時の様子を感じさせますが、やはり想像だけでは理解し得ない、つかみとれない部分が残ります。ところが修復されすぎてしまった遺跡は、遠目からでは「きれいだな」と思えるのかもしれませんが、近くで見ると嘘っぽさというか人工的なものを感じてしまいます。しかし、このスタディツアーのように、文化財の保存や修復という観点から見学するのでなければ、修復のない遺跡は「ああ、壊れちゃっているな」と思い、過度なまでの修復がなされた遺跡は「ああ、白くてきれいだな」と思うだけだったかもしれません。文化財を修復し、保存していくことは大切だと思っています。それが自分の一生の仕事になればと思い、研究をしています。しかし、そこには文字通り様々な問題がつきまといます。そのうえ、それらの問題は日々変化し、日々大きくなっていきます。現場でだからこそ、それを強く感じ再認識することができました。今後研究を進めていく上で、今回のツアーでの得た視点は非常に重要なものとなりました。

ロイ・クラトンのお祭りに参加できたことも忘れられません。自分を悔い改めるような気持ちでクラトンを水に流した時、隣でタイ国イコモスのVasuさんがクラトンを流そうとしていらっしゃいました。クラトンに真摯に思いを込めている姿がそこにはありました。観光客がクラトンを流すのとは全く違う、心からの信仰、水への感謝と魂の清め……そういったものを強く感じ、「彼の思いがちゃんと伝わるといいな」と思いました。満月の明るさ、打ち上がる花火、夜空に浮かんでいく気球、どれもなんだか夢のようでした。前から2列目という好条件で歴史劇を見ることもできました。遺跡に与える影響を考えると、少し複雑な思いも持ったことも事実ですが……。

バスの車幅と同じ幅しかないんじゃないか！？　と不安になるような細い道路を通り抜けてやっとたどりついた、吊り橋の揺れる「リゾート」ホテルも、焦って空港内を走り回ったり、渋滞にやきもきしたにもかかわらず出発の遅れた飛行機も、今となっては笑って話せる良い思い出です。

「今回のスタディツアーでの経験を、今後の研究や人生に活かしたい」と口で言うのは簡単です。でもそんなありきたりな言葉では表現したくないくらい、有意義な経験をたくさんすることができ、空港で買ったお土産以上に価値のあるものを手に入れて日本に帰ってくることができました。今後、研究や人生の中で選択を迫られた時、今回の経験を振り返り、ヒントにしながら一つ一つ進んで行きたいと思っています。不勉強で幼稚な質問にもご丁寧な解説をしてくださり、それ以外にも色々なお話を聞かせてくださった西浦忠輝先生、友田正彦先生、いつも笑顔で参加者を先導してくださった八木三香さん、松本洋子さん、そして、ともに楽しい時間を過ごさせていただいたツアー参加者の皆さん、本当にお世話になりました。どうもありがとうございました。またいつの日か、松本さんの「行きまーす！」の掛け声を聞きに、ツアーに参加できたらいいなと思います。

タイ・スタディツアーに参加して

国士舘大学イラク古代文化研究所職員
岩田　玲子

今回、西浦先生よりタイ スタディーツアーのお話を伺い、興味を覚え是非参加したいと思いました。保存修復に関する知識はほとんどないのに参加して大丈夫かな？　という不安もありましたが、文化財保存の専門家に説明をしてもらいながら文化遺産をめぐる旅なんてそうそう出来るものではない！　と思い、共に専門知識を持たない父と参加させていただきました。

友田先生、西浦先生を始め、タイ王国文化省・イコモスの皆さんが初歩的な質問にも丁寧に説明してくださり、保存修復やタイの様々や建築様式について知識を深めることができました。またツアー参加者の方々がそれぞれの分野で活躍されている修復などの専門家なので、同じ遺跡でも様々な違う視点から見ておられ、意見を交わされているのを聞いていることも大変勉強になりました。

11月1日、私達は数ヶ月前にオープンしたタイ新国際空港に降り立ちました。バンコク市街に向かうバスの中では、早速友田先生がタイ国の成り立ち、これから向かうアユタヤ、スコータイなどの都市が歴史の流れの中でどのような役割を果たしてきたのかについて説明してくださいました。到着の夜には、食事会があり、タイのスタッフの方々、また参加者の皆さんと交流することが出来ました。

私たちが、4日間で訪れた数多くの遺跡のうち、特に印象に残っている遺跡をいくつか取り上げたいと思います。

アユタヤ

〈ワット・モンコンボピット〉

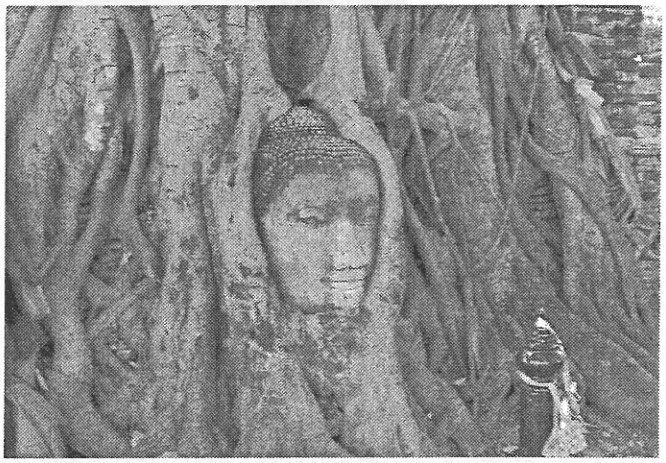
旅の安全を祈るために一番初めに訪れたこの寺院、最大級のブロンズ製黄金仏があるはずのお寺に入ると黒々とした大きな仏像が。丁度金箔を張り替えているようでした。そのような状態の仏像を見るのも珍しく、興味津々。和太鼓に良く似たものも展示されていて、文化の繋がりを感じました。

〈ワット・プラ・マハタート〉

ここでは西浦先生が実際に関わっていらした防水材の実験の現場を見学しました。一対の王座のように見える等身大の煉瓦の塊。これが実は、別の場所にある建築物の保存処理ための実験場なのでした。水平面にのみ防水材を塗り、薄い排水溝をつけたものと、未処理のもの。この二つの差は歴然でした。水平面の処理のみでもその効果はてきめんで、未処理のほうの垂直面の黒ずみとは大きな差が出来ていました。また後部には含水量を調べる機械が付けられ、モニターされているようでした。

ここには有名な木に取り込まれた仏像の頭部があり、多くの観光客が写真を撮る中、私も記念写真をとりました。頭部のない仏像は数多くありましたが、印象に残ったのは記念撮影をする観光客への注意書きでした。それには仏像の頭の部分に自分の頭を乗せて撮影しないこと、また、仏像の頭の位置よりも自分の頭を高い位置に持っていかないこと、などの注意が書かれていました。頭部が失われていようとも、往時の姿とは代わってしまっていようとも、仏像は仏像であり続け、神聖な寺院という場に対する畏敬の念を忘れてはいけないのだ、ということを深く胸に刻みました。

アユタヤ　ワット・プラ・スィー・サンペット(Wat Phra Sri Samphet)



アユタヤ　ワット・プラ・マハタート(Wat Phra Mahathat)　木の根に取り囲まれた仏像の頭部

〈ワット・ラチャブラナ〉

クメール様式の仏塔を持つこの寺院で印象に残っているのは、地下の壁画でした。狭くて暗く、そして人を寄せ付けまいとしているような急な階段を下っていくと、彩色の残る壁画がありました。しかし、階段を下りたところで私の太ももには異変が……。日頃の運動不足か、私の太ももは旅行初日に早くも音を上げたのでした。

スィー・サッチョナライ

スコータイに都があったとき、北のへの守りのため王の子供が住み副都とされたスィー・サッチョナライでは、優美な姿の歩く仏陀 遊行仏が強く印象に残っています。

〈ワット・プラシー・ラタナー・マハタート〉

城壁の東側に位置するチャリエンにある、遊行仏 美しいプラーン（仏塔）が有名な寺院でした。スコータイ以前に立てられた後、アユタヤ時代に修復されたそうで、スコータイ時代の蓮の形をしたパコダ（仏舎利）が収められていました。モ

スィー・サッチョナライ ワット・プラシー・ラタナー・マハタート(Wat Phra Sri Ratanamahathat)

ンドップという仏像だけが入っているお堂もありました。

〈ワット・ナン・パヤー〉

世界遺産に登録されている漆喰の彫刻で有名な寺院。アユタヤ朝初期に作られたという彫刻は細かく繊細で、大変美しいものでした。西浦先生によると、保存のために使われたパラロイド（アクリル樹脂）の影響か、以前より赤っぽくなっているように見えるとのこと。昔はもっと白かったように記憶しているとおっしゃっていました。保存のために使った近代的な原料が時間を経てまた遺跡に影響を与えるのは、考えてみれば当然ですが、修復保存の一筋縄では行かない難しさを実感しました。

カンペン・ペット

スコータイ時代、スィー・サッチョナライが北への守りの都市であったのに対し、カンペン・ペットは南への守りとして重要な位置を占めた都市だったそうです。14世紀頃城壁が成立したと記録に残っています。カンペンは壁の意味でペットはダイヤモンド、つまりダイヤモンドの壁という名前の都市なのです。アユタヤ朝時代には、ランナタイへの北の守りとして重要視されたため、アユタヤ朝時代の建築物も残っています。遺跡公園の中は電気自動車で見学しました。

〈ワット・プラケーオ〉

バンコクにあるエメラルド仏が、ここに祭られていたという伝説が残る寺院。二体の座仏の前に寝仏、計3対が横たわっている。タイで信じられているのは上座部仏教で、日本の大乗仏教とは違う考えを持っているそうです。例えば、仏は釈迦のみで、弥勒菩薩や阿弥陀如来など様々な仏は存在しない等。前日のワット・プラシー・ラタナー・マハタートにも、前後

カンペン・ペット ワット・プラケーオ(Wat Phra Kaew)

二体で大きさの違う座仏（親子仏？）がありましたが、それもこの三体もすべて釈迦であると考えると、大乗仏教の考えになじんだ私にとっては、複数の仏像（釈迦仏）が並んでいる姿は見慣れず不思議な感じがしました。

仏像の芯はラテライトで作られ、漆喰で細かい装飾をつけています。漆喰が落ちラテライトのみの状態になった仏像もあり、それらはピカソの彫刻を思わせるような造形でした。

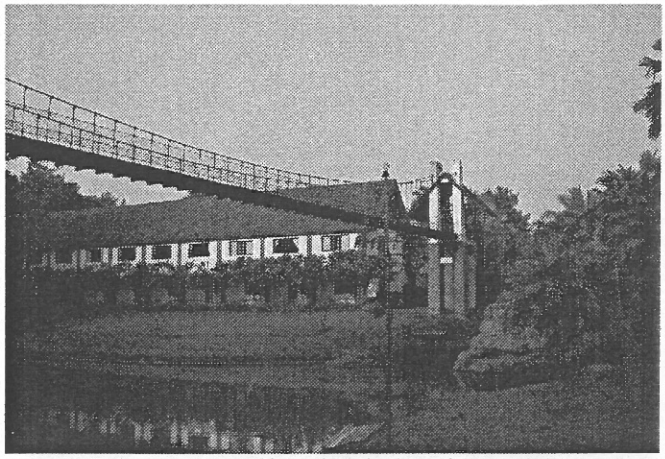
〈ワット・ボラマタート〉

カンペン・ペットの街に王が立てた初めてのスコータイ様式の仏塔だったそうですが、19世紀にビルマの商人が寄進したため、今はビルマスタイルの塔が建っています。この寺院は今回の旅行で唯一、金ピカしていたお寺だったと思います。ただし、本来のビルマスタイルは銅版の上に金箔を貼るところ、こちらは金泥（もしくは金のペイント）を使用しているようで、いまひとつきらびやかさに欠ける印象でした。モン文化の影響で境内には風見鶏のような装飾がありました。

〈昼　食〉

ホテルのバイキングなどお洒落な場所での食事が多かった中、カンペン・ペットでは有名なヌードルを道路わきの普通のお店で頂きました。ワンタンやつみれのようなものが入った、黄色い細めの麺にスープはトムヤムとスタンダードどちらかが選べます。両方試しましたが、私が気に入ったのはトムヤムでした。このスパイシーさがたまりません！　スタンダードはかなり甘い味付けで、物足りない私は唐辛子入りのナンプラーを加え、美味しく頂きました。

カンペンペット特産ヌードルで昼食。中央が岩田玲子さん。



スコータイリゾートホテルの吊り橋。これを渡らないと部屋に入れない？

〈ロイ・クラトン〉

日本の灯篭流しのようなお祭りである、このロイ・クラトンに参加できて、本当に良かったと思っています。満月の美しい夜にライトアップされたスコータイの遺跡群、幻想的に舞い上がる気球、鮮やかな衣装・花火の歴史劇、人々の思いを乗せ水辺に流された数多くの燈篭。あの時にあの場所でしか味わえない経験をさせていただきました。遺跡へのライトアップや花火などの影響もあるでしょうが、文化遺産というのは何も物質的なものに限定されるものではないと思います。土地に根ざした人々の生活、習慣、信仰、自国の国王や歴史に対する敬虔な思い、それらすべて文化であるのですから。

スコータイ

〈ワット・スィー・チュム〉

この寺院は日・タイ共同プロジェクトで保存修復を行っているそうです。本日のメインの遺跡の一つでした。ご自身自らプロジェクトに関わられた、西浦先生のこの日の衣装は、こちらの寺院をプリントしたTシャツでした。現地専門家によると、漆喰の原材料は、ライムストーン 象やバッファローの皮、漆、バナナの木の皮、砂、水だそうです。様々な材料が使われていることに興味を覚えました。

現地の気候を考慮し、その土地にあった建材や手法を用い保存修復を行っているのを見学させていただき、修復保存の奥深さ、難しさを痛感しました。どんな素材であっても経年劣化は免れず、薬剤を使用したところで、藻などの自然の生命力は遺跡を脅かします。その中で、どう文化遺産を守っていくのか、保存修復に関わる方々のたゆまない努力に頭が下がります。

〈スコータイ遺跡博物館〉

こちらでは、館長さんが自ら説明をしてくださいました。私が特に興味を持ったのが、遺跡から発掘された遺物をどう展示するか、その展示方法についてでした。

ある遺跡のチェディ（プラーンかもしれません）の底部から仏像が発見されました。この仏像をどう展示するか。普通ですとガラスの扉の付いた展示ケースに飾ってしまうかもしれませんが、それではこの仏像が発見されたバックグラウンドが失われてしまう。そこで、チェディを縮尺したものを円形の展示ケース内につくり、仏像が置いてあったその状況のまま、他の発見された遺物と共に展示してあったのです。このような、展示品一つ一つのストーリーを大切にする展示はすばらしいと思いました。

スコータイ トラパン・トン・ラン寺院 (Wat Traphang Tong Lang)

〈トラパン・トン・ラン寺院〉

住友財団の助成で修復が行われたこの寺院は、このスタディツアーで訪れた最後の遺跡でした。漆喰の美しいレリーフで有名だったそうですが、今では一部にしか漆喰が残っていませんでした。その残ったレリーフも風化などで、どんどん漆喰が落ちてしまっているようです。

今回のスタディツアーに参加し感じたことは、修復保存後の遺跡の管理の重要性についてです。数多くある遺跡一つ一つ全部に監視員などをつける対策を取ることは不可能に近いことかとは思います。しかし折角修復が行われたのにも関わらず、一方ではこの寺院のように、常時管理する体制の無いまま、貴重な遺跡が放置に近い状態にされていることは大変残念に感じます。これでは、落ちたレリーフを持ち帰ることも、まだ残っている部分を破壊し、人知れず持ち去ることも簡単に出来るように思いました。一介の旅行者が数日見学・研修しただけでは、理解できていないことのほうが多いとは思いますが、修復保存の実施のみが最終目的にならないような活動・支援をしていくこと、継続して文化遺産の保護に努めることの重要性を痛感しました。

遺跡のみに関わらず、興味深いお話をしてくださった西浦先生と友田先生、すばらしいホスピタリティで私たちを迎えてくださったタイ王国文化省やタイ王国イコモスの皆様方、いつも笑顔で、ばらばらになりがちなグループをまとめてくださっていた松本さん・八木さん、様々な分野で活躍されている個性あふれる参加者の皆様方に深く感謝申し上げます。次回のスタディツアーで、再び今回の参加者の皆様、そしてこのニュースレターを読んでいらっしゃる皆様とお会いできると良いなと考えています。

岩田　政夫

初めてこのような文化遺産スタディツアーに参加し、門外漢の私がどうなるかなという不安がありました。参加した皆さんが遺跡の問題について強い関心があることに、大変感銘を受けました。

修復とは、遺跡を元の姿に完全に戻す事が目的だと単純に考えていましたが、今回のツアーに参加し、もっと奥深いものである事が分かりました。楽しく、実りある6日間を娘と過ごせた事を感謝しています。皆さんありがとうございました。

1000年の都の中で

独立行政法人国立博物館　京都国立博物館学芸課長
森田　稔　先生インタビュー

文化財を語る上で欠かせないのが、博物館の存在です。

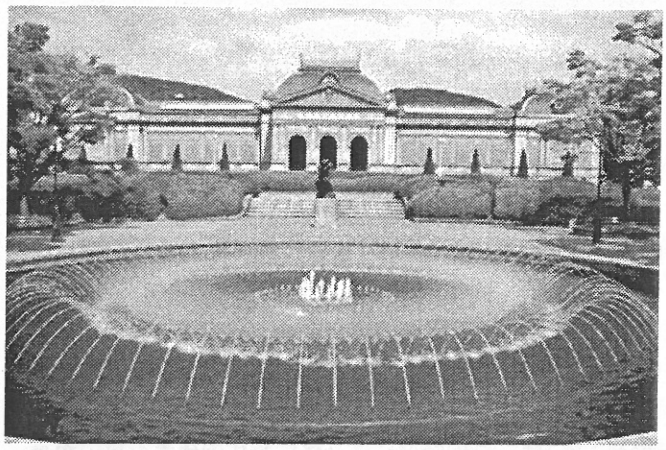
中でも「国立」を冠した博物館は、現在日本に4館設立されています（東京国立博物館　京都国立博物館　奈良国立博物館　九州国立博物館）。

これら4館は、平成13年に独立行政法人国立博物館として、形の上では同じ組織になりました。しかし異なる歴史背景や地理的条件の中で、自ずと独自の個性を発揮しているように見えます。文化財の保存に対する取り組み方も、各々の館によって特色があります。

NPO JCP NEWS No.11では、東京国立博物館保存修復課長・神庭信幸先生に同館の取り組みを報告して頂きました。東博では直接技術者を抱え、館員がより深く修復の内容に関わって行こうというものでした。これは国立博物館の中では先端的な試みと看做されています。

今回は一転して歴史と伝統の都にある、京都国立博物館学芸課長　森田稔先生に直撃インタビューを試みました。

空気が一段と冷え込んだ12月はじめ、終わりかけた紅葉を愛でながら、京都東山の京都国立博物館学芸課へお伺いしました。お忙しい中、快く対応してくださいました森田先生に、先ずは厚く御礼申し上げます。



Ⅰ.京都国立博物館における文化財修理体制

まず京都国立博物館の文化財修理のシステムをお聞かせください。

「帝国博物館の設置に関する定めができたのは明治22年（1889年）です。これに従い、明治30年に帝国京都博物館（現・京都国立博物館～以後「京博」と略）が開館します。古社寺保存法も明治30年にできますが、それ以前から明治政府は文物の保存のため、古社寺保存金という補助金を出しています。この流れの中で、京博は開館するときに受託の規則を作りました。即ち修理物件については全て寄託してもらい、寄託を受けたらその作品は博物館のお金によって館の中で修理する、という原則です。なぜなら当時の伝統的な工房は、殆どが京都の町中にあって木造の建物の中で修理をしており、火災や盗難などのセキュリティに不安があったからです。当時は民間の修復工房が、館内のあちらこちらにスペースを作って修理を行っていました。そこで昭和55年に現在の文化財保存修理所を建造し、修理工房を収容することになりました。修理室は光熱費以外すべて無償で民間工房に貸しています。関連設備としてX線透過装置、燻蒸の施設があります。これらを工房が使用する場合は、届けを出してもらい、こちらで許可後使用してもらうようにしています。現在入居しているのは、装こうの工房が4、彫刻が1。装こうは全て国宝修理装こう師連盟所属工房であり、彫刻は財団法人美術院です。

では館側はどうかといいますと、現在の体制は設立時のコンセプトを継承したものです。修理運営委員会があり、修理予定物件について審議します。この運営委員会以降に修理を行うことになった文化財については、館長決済ということになります。基本的にここで修理するのは指定品のみ。未指定品の場合は検討を行った上、受け入れます。

奈良国立博物館は京博をモデルにして作られ、これら2館を参考に九州国立博物館が作られているので、形はそれぞれ違いますが規則などは皆ほぼ同じです。京博と奈良博では保存修理指導室を設置し、美術史の専門家を配置しています。京博では絵画（平面）と彫刻（立体）一人ずつ、二人の体制で臨んでいます。指導室では、修復工房の人たちと緊密な連絡を取るため、1ヶ月に一度工房の巡回を主催します。また2ヶ月に一度修理者協議会を開き、館 修理者双方からの要望を交換する、という仕組みを作っています。また博物館内で修理する技術者には全てIDを発行し、館員に準じた扱いをしています。東博では、館の人間が直接修理に携わる体制を進めていますが、京都では社寺などとの結びつきの中で民間工房が技術を研鑽してきた歴史があり、その伝統を重んじるべきだと思っています。現在の体制は、ベストとは言わないまでも、ベターチョイスだと思っています」

現在は装こうと彫刻の2分野とのことですが、今後工芸や考古修理などの工房が入居する可能性はあるのでしょうか？

「それは考えていません。例えば指定品の考古遺物の場合な

ら、関西には元興寺文化財研究所があります。他にもいくつか大きな施設を自前で持つ修復会社が存在しており、博物館で直接抱える必要はないと思います。特に考古は有機溶剤を使ったりしますので、環境管理が難しいでしょう。国指定文化財修復補助事業全体の60数％が京博での事業――装こうと彫刻の2分野です。現在の形は崩せません」

II.所有者と修復技術者の狭間で

先生は広島大学の考古学出身ですが、文化財修復に関わられたのはいつからでしょうか？

「私は広島大学から名古屋大学大学院へ進み、神戸市教育委員会で5年間発掘にかかわり、その後神戸市立博物館で11年9ヶ月、文化庁へ移って調査官　主任調査官として7年4ヶ月を過ごし、2年前から現在のポジションになりました。その中で修復を意識したのは、神戸市立博物館時代、昭和60年に同館所蔵の国宝桜ヶ丘銅鐸と銅戈の修復の担当になったときが最初です。装こうの修理には文化庁時代の後半ぐらいから関わり、今ここで修理工房の大家さんのような立場で、工房の皆さんとお話しする機会も多く、その中で学んできました」

京博ではゆるぎない体制で臨んでいることが分かりましたが、現在世の中は入札制度導入へと動いています。この流れはに対してはどのようにお考えでしょうか？

「フランスでも15年ぐらい前から入札制度導入の動きがあって、安いところが受注する弊害が出ているようです。その結果修復材料の質が落ち、修復内容の質が落ち、人材が育たない……という悪循環に陥っています。世の中安いのが万能、という考え方がよくない。今の日本では、連盟のように修復技術者が倫理観をもってやろうとしているから保っているようなものの、他が参入してきて安くなってきた場合、フランスと同じことが起きる可能性があるということです。今仮に入札制度を受け入れなければならないとしたら、客観的第三者機関が修理のメニューについて提示し、値段以外の基準をしっかり見せることが必要だと思います」

当機構では、そのような第三者的性格をめざしていますが、今のところ調査や設計に予算をつけてもらえることは少ないので、事業として成り立たないという悩みがあります。

「ご存知のように登録文化財制度は建造物以外にも拡大されました。この補助制度には修理設計費が計上できます。修理仕様は第三者機関が受け持ち、工房は各々の技術に磨きをかけていけば良いのです」

第三者機関としては客観性を持たなければならないと思います。人の判断をいかに客観化するか……。例えば過去の修復データを蓄積し、閲覧できるようにするなどというシステムが必要だと思いますが。

「ある先生が、保存科学者はすぐデータデータと言うが、経験が大切だ、とおっしゃっていました。連盟の技師長クラスであれば、修理仕様にそんなに大きな差が出ることはないです。あとは予測できないことにどう対応するか……それが技術者側の技量であり、責任であると思います。指定文化財を取り巻く当事者は2～3者－所有者、施工者、行政－です。所有者にどの程度専門知識があるかというと、それは期待できません。では行政にどこまで期待できるのか？　誰かがイニシアチブを取ってこうしなさい、というのではなく、施工技術者が修理方法の選択肢を列挙し、それぞれのメリットデメリットを説明し、いかに伝えていく努力をするか。これを最優先にすべきだと思います。指定品は行政が第三者機関として所有者と施工者の間に立ってこの情報の橋渡しをしています。指定品以外は皆さんの出番なのではないでしょうか？」

III. 民営化の流れの中で

また、指定管理者制度が導入されて、地方の美術館博物館では管理を民間企業が請け負うケースが出ています。NPO法人も管理者として入札の資格を持たせる自治体がふえていますが、労働組合などはこの制度にかなりの危機感を持っているようです。

「基本的にはこの制度は賛成できません。国の組織の場合は市場化テストと言って、民間ができる部分はかなり民間へ委譲することになりました。例えば衛士さんなどは以前は館が直接雇っていましたが、今では民間委託になろうとしています。今年度は民間委託の部分をもっと増やせと言われたのですが、平山郁夫先生、高階秀爾先生を中心に文化庁長官あて

指定管理者制度

指定管理者制度（していかんりしゃせいど）とは、それまで地方公共団体やその外郭団体に限定していた公の施設の管理を、株式会社　民間業者などの団体にもさせることができるというもの。小泉政権発足後の我が国において急速に進行した、「公営組織の法人化　民営化」の一環とみなすことができる。

プロポーザル方式などで管理者を選定し、施設を所有する地方公共団体の議会の決議を経て管理者の指定（＝管理運営の委任）をすることができる。　管理者は民間の手法を用いて、弾力性や柔軟性のある施設の運営を行うことが可能となり、その施設で利用料金制がある場合は、利用者から得られる収入を自治体との協定の範囲内で管理者の収入とすることができる。

施設の管理運営全般が管理者に委ねられることから、最終的には「公の施設が民営化される」という見方をされる事が多いが、税金で設置された施設が管理者によって私物化されるのを防ぐため、管理を委託した地方公共団体による監査のほかにも定期的な収支報告会などを設けることにより、利用者であり本来の所有者でもある市民のチェックが必要となる。

一般的には利用時間の延長など施設運営面でのサービス向上で利用者の利便性が向上するほか、管理運営経費の削減によって施設を所有する地方公共団体の負担の軽減に繋がる。　しかしその一方で、以前は税金によって運営され、市民が無料または格安で利用できていた施設が、「制度の導入以降、利用料金が一般的な民間施設と同等に

に要望書を出して、やっと1年先送りになりました。この仕事は継続性が重要なんです。数年毎に管理者が変わり、経営方針がころころと変わっては、情報や技術が途切れてしまいます。文化財を扱うところに継続性がなくなってはどうしようもないでしょう。

人材の育成も同じことです。知識は1人で終わるが、経験は受け継がれ、そして発展させていくことが大事です。博物館は大学や研究所と違い、物があり続ける限り同じ精神で続けなければなりません。国立博物館は4館それぞれのスタンスで進んでいますが、独自のスタンスを崩さないのが、地方館へのメッセージだと思っています。そして、我々の手の届かない地域についてはNPOのような組織が手を差し伸べるべきでしょう。今課題となっているのは、所有者に修理方針を選択させる情報の伝達方法、途中のケア、アフターケアをどうするかだと思います」

IV. 100年後も同じ体制で

最後に、今後の抱負をお聞かせください。

「現在修理所の改修工事を進めており、工房ごとに空調調節ができるようにするなど、文化財にとってより良い環境作りを進めています。また工房からの要望として、紙漉き場がほしいという声がありました。そこまでの予算はなかったのですが、工房同士で拠出するからというので、一室提供することにしました。このように、館の人間と工房の人間が一体となっているのが我々のいいところだと思っています。年末・年始の挨拶、地蔵供養などの行事なども一緒に祝います。それが京都ならではの美風ではないでしょうか。さらに、学芸課の若い世代と工房の若い技術者たちが参加してくれることで、この体制は継続を図れると思います。京都国立博物館は、京都らしいやり方で110年の歴史を作ってきました。今後の100年もこの方式を継続していくつもりです」

森田稔先生プロフィール

1978年	広島大学文学部史学科考古学専攻卒業
1980年	名古屋大学大学院文学研究科考古学専門博士課程（前期）修了
同　年	神戸市教育委員会文化財課学芸員
1985年	神戸市立博物館学芸員
1996年	文化庁入庁 美術工芸課主任調査官、 文化財管理指導官　を経て
2004年	京都国立博物館学芸課長 現在に至る

インタビューを終えて

世の流れは、より一層の情報開示を求める傾向にあります。森田課長は、その必要性を最も強く感じておられるお一人だと思いました。当機構へも、NPOとしての活動方式に貴重なサジェスチョンを頂きました。お話を伺っていて、第三者機関として客観的であるということは、非常に難しいことだと改めて感じた次第ですが、「情報はすべて伝える努力をすること」「メリットデメリットを説明すること」「選択肢を示すこと」そんな言葉の中に、十分なヒントを与えていただいたように思います。文化財の世界にもインフォームドコンセントが必要なのです。世の中に信頼される組織であるためには、常に自らを省みて信頼に足る組織であるかどうかを検証し続けることが必要だと思います。

明治の頃から「所有者」⇔「行政」⇔「施工者」の三位一体を貫いてきた京都国立博物館のシステムは、今後もひとつの典型を示し続けていくのでしょう。

「継続性」というキーワードは、神庭先生も寄稿の中で言及していたことを思い出しました。形こそ違え、文化財の番人の想いは同じなのかもしれません。

社会の変革の中で、ゆるぎない体制を続けていくということは、決して簡単なことではないと思いますが、「100年継続させる」と、さらりと断言される学芸課長には、「伝統」に裏打ちされた自信がおありになるものとお見受けしました。

（八木三香／山岡寛）

なってしまった」、「管理者が施設の利用を恣意的に設定制限するために、今までと同様に利用できない」といった問題も発生している。

実態からみた指定管理制度

制度導入の理由そのものが地方公共団体の財政難にあることから、制度導入以前からその施設に勤務している職員（つまり公務員）だけでなく一般の利用者からも、「行政と直接結び付かない施設及び職員の切り捨てである」という意見が多く見られ、既に外部委託されていた事業所が、さらに指定管理者制度を適用されて、委託費を削減されている現実がある。結果として管理者が、収益向上と称して当該事業所と無関係な民間企業の広告を施設内に掲示するといった「儲け主義」に走る、経費削減の名の下に本来必要なはずの設備修繕を怠る、職員への過剰なサービス残業を強要する、施設の日常管理をアルバイト人員のみで対応させるといった「手抜き管理」を行うなど、公共施設として非常に不適切且つ問題のある例も多く見られる。

当然ながら移行期には前述のとおり、公務員として制度導入以前から勤務していた職員と、人事異動による退職者や転出者の穴を埋めるべく導入以降に管理者が独自に採用した職員とが混在することがあるため、その場合は当該職員らに対する給与体系だけでなく、人事異動も含めた身分の扱い等が問題となる。

出典：フリー百科事典『ウィキペディア（Wikipedia）』

明けましておめでとうございます　本年もよろしくお願いいたします

東洋絵画、書籍等の装潢、保存、修復用材料専門

木灰宇陀・美栖・美濃・楮紙・補材和紙・養生紙等
表装裂地、収納桐箱、軸首等

有限会社 根本

〒179-0073　東京都練馬区田柄2－6－17
TEL03-3930-7052
FAX03-3930-7053

有限会社 資料保存工房

資料の保存容器と保存用包材取扱 / 保存額装処 / ブックマット制作等
〒603-8123 京都市北区小山下花ノ木町 35-6 TEL: 075-494-2651 FAX: 075-494-2610
URL: http://www.conservation.jp E-mail : office@conservation.jp

Shiryo Hozon Kobo Co., Ltd.
Work contents: Environmental Monitoring and Control Condition Check and Data processing. Distribution of Materials for Preservation etc.

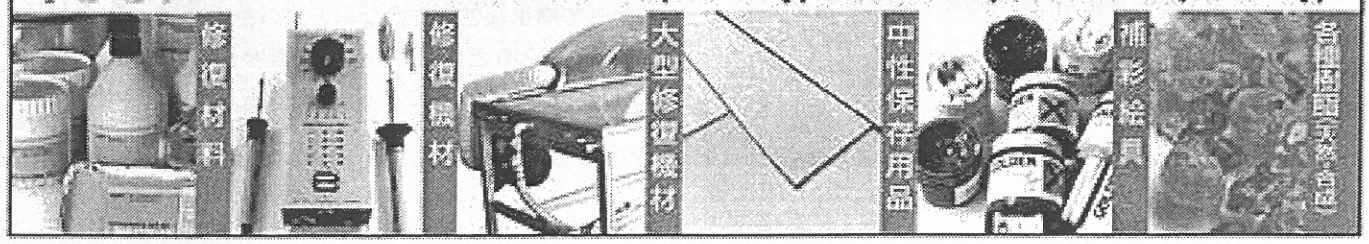
PAReT
Preservation And Restoration Tool
Preservation And Restoration Tool
文化財の保存修復用品の製造と販売
株式会社 パレット

取り扱い海外メーカー
Lascaux　Deffner & Johann　Linetti　Talas　University products　Willard　pel　GOLDEN ARTIST COLORS　LIGHT IMPRESSIONS

文化財・美術品の修復に関しての情報源・ナレッジバンクとして、お手伝い致します。
国内外の保存・修復関連用品を多数取り扱っております。入手が難しいものでも、
是非ご相談ください！資料やサンプルを送付致します、お気軽にお問い合わせ下さい。

皆様からのお問い合わせを、心よりお待ちしております。

〒604-8306
京都市中京区門前町539-16
TEL:075-803-1277
FAX:075-811-8068
Mail:office@paret.jp　Web:http//:www.paret.jp



JCP事務局通信

Ⅰ．九州国立博物館バックヤードと大宰府の文化財見学ツアー

●日　程：平成19年2月17日（土）～18日（日）1泊2日
●主　催：NPO文化財保存支援機構
●協　力：九州国立博物館　●後　援：文化財保存修復学会
●参加資格：大学生以上で興味のある人ならだれでも
●内　容：普通は見ることのできない博物館の舞台裏、文化財の修復工房や収蔵庫を見学。二日目は太宰府天満宮、観世音寺、大宰府政庁などを訪ねます。（二日市温泉泊）
●参加費：
〈羽田発〉NPO JCP会員：58,500円／後援団体会員：59,500円
一般：61,500円
〈伊丹発〉NPO JCP会員：54,500円／後援団体会員：55,500円
一般：57,500円
※詳細は、同封のチラシをご参照ください。

Ⅱ．タイ国　スタディツアー報告会と新年会のお知らせ

●日時：平成１９年１月１３日（土）　午後３時より
●会場：国士舘大学梅ケ丘キャンパス地域交流文化センター2F（TEL：03-5451-1926）
●参加費：無料
●新年会費：実費（3,000円～4,000円程度）

Ⅲ．NPO文化財保存支援機構　関西支部第１回例会「関西支部の方向性～これまでの事業を振り返って～」

■日　時：平成19年1月14日（日）13：30～16：45
■会　場：キャンパスプラザ京都第4講義室（〒600-8216　京都市下京区西洞院通塩小路下ル～京都駅ビル駐車場西側、京都中央郵便局西側）
■進行役：大林賢太郎氏（NPOJCP副理事長／関西支部長）
■お問合せ先：NPO文化財保存支援機構　関西支部事務局
担当；山岡　寛　TEL：075-334-8450　FAX：075-334-8451

Ⅳ．NPO文化財保存支援機構第16回月例交流会　in　東博

■「文化財を守る－保存と修復」展示コーナー（東博本館17室）開設記念講演会
「臨床保存学のすすめ－文化財の保護と東博の使命」
○日　時：2007年2月4日（日）13：30～15：00
○場　所：東京国立博物館平成館大講堂
■「東博の文化財保存修理の歩み」（質疑応答）
○時　間：15：15～16：30
○場　所：東京国立博物館資料館セミナー室
■保存と修復展示コーナー解説
○時　間；16：00～16：30
○場　所；本館17室展示コーナー
■講師：神庭信幸氏（東京国立博物館　保存修復課長）
■午後1時に正門前集合　※入場券をお渡しします。
■参加費：会員；1,000円　非会員；2,000円

Ⅴ．NPO文化財保存支援機構第17回月例交流会「文化財の写真撮影の基本と応用」

■日　時：平成19年3月3日（土）午後（時間の詳細は未定）
■講　師：野久保　昌良氏（元　東京国立文化財研究所）
■会　場：浅草公会堂　第一集会室
（東京都台東区浅草1-38-6　TEL：03-3844-7491）
■　詳細は、後日ご案内申し上げます。どうぞお楽しみに！
※上記に関するお申込み、お問合せは、
メールjikumukyoku@jcpnpo.org
あるいは電話03-6770-1682、FAX 03-6770-1683まで。

書籍紹介

古今東西

「陶磁器の修理うけおいます」

甲斐　美都里　著　中央公論社
2002年4月7日　初版　2003年6月30日　再版発行
定価　1,600円＋税

文化財保存支援機構の事務局を務める以上、修復に関する様々な電話相談に対応するのも仕事のうち……とは思うものの、意外に困るのが陶磁器の修復（修理）相談である。

正直な話、現在当機構の登録会員で陶磁器修理を掲げている人はいない。これはどうも当方に限ったことではないらしい。文化財保存修復学会でも数えるほどしかいない。その原因は、陶磁器が美術商や骨董屋さんの世界に属するとのイメージが強く、「可逆性」だの「オーセンティシティ」だのを標榜する修復技術者の敬して遠ざける所となっているからかもしれない。確かに金継ぎに代表される陶磁器の修理に「可逆性」を求めるのは無理というもの。でも本当に無理なの？

その疑問に鮮やかに答えてくれるのが本書である。

著者は京都で生まれ、60年代の自由な空気の中で高校時代を過ごしている。その高校が大徳寺のすぐ隣であったことから、よく遊びに行く塔頭（たっちゅう）で国宝のお茶碗を見せてもらい、あろうことかそのお茶碗でぶぶ漬けを食べたというツワモノである。そこから骨董好きが嵩じ、集めた器を修理してくれるところを探したのだが見つからない。すでに一流外資系企業の秘書をしていた著者は、独学で修理を学ぼうと決意。国内で教えてくれるところを探したが見つからない。ついに英国に学校があるとの情報をつかみ、即留学。そこでひととおりの技術を習得して帰国……そしてついに「ユスタ　ルフィナ」という陶磁器修復工房を開業するに至るまでの疾風怒涛、抱腹絶倒の修業日記である。

と同時に、現在の陶磁器における修理修復方法を網羅して、コラムで紹介。分かりやすい入門書ともなっている。

彼女のバイタリティの源泉は「好き」ということ。器が好きで好きでたまらない。気がついたら仕事にできるまでになっていた……という人である。だから「専門家である」という気負いが全くない。例えば「修理」と「修復」という言葉の用法も、技術者の間ではよく議論の対象になるが、彼女はスパッと両断してみせる。即ち「修理」は「元通り使えるようにすること」。「修復」は「外観を元の状態にもどすこと」。この見解にはセンモンカとしては異論のある方も多いかと思う。しかしそれはさて置き、愛着のあるものをなんとか手当てしてほしいという差し迫ったニーズがあるのもまた事実。甲斐さんはそのニーズを、誰よりも深く理解しているのだろう。

実は甲斐さんとは電話で一度お話している。某美術館からの修復相談で困り果て、芸大大学院保存科学出身の友人に相談したところ、その存在を知った（甲斐さんはこの本を出版した後、東京藝術大学大学院美術研究科文化財保存学　保存修復科に入学している）。

思い切ってお電話したところ、「基本的に主婦やし、翻訳の仕事もあるし、お金には困ってないし、できることなら時間のかかる仕事はしたくない……」と、贅沢なお言葉。誠に心からうらやましい。しかしそう言いながら、誠実に相談内容に耳を傾けてくださり、最終的には、依頼者にユスタ　ルフィナを紹介することを承諾して頂いた。

一度是非お会いしたい……と思わせる元気な方だった。
伝統ある土地は時々破格な人を生み出す。
恐るべし京都……である。　（M.Y.）

ご入会ありがとうございました。

（平成１９年１月１日現在入会者数）

□理　　事　6名　　□維持会員 13名

□登録会員 161名　　□一般会員 96名

□賛助会員　28件
（株）宇佐美松鶴堂
（株）岡墨光堂
（株）和蘭画房
桂文化財修理工房
（財）元興寺文化財研究所
（株）京都科学
京都造形芸術大学　歴史遺産研究センター
（有）黒田工房
（株）芸匠
（株）光影堂
有限責任中間法人　国宝修理装こう師連盟
（株）坂田墨珠堂
（株）修美
宗教法人　正法院
靖斎文化財保存研究所
日本通運株式会社　美術品事業部
長谷川和紙工房
（株）半田九清堂
百元　節
（株）フレンドトラベル
（株）文化財保存
（有）文化財修復技術研究所
溝川商店
山領絵画修復工房
他個人４名
（アイウエオ順　敬称略）

NPO JCP の活動に参加してみませんか？

□ **登録会員**：年会費　7,000円
文化財保存に関わる専門的技能を持ち、プロジェクト遂行に協力する個人。
登録会員は文化財の保存事業を行うための専門家で、文化財に直接関わる専門家とは限りません。

□ **一般会員**：年会費　5,000円
この法人の目的に賛同し、支援する個人。

□ **賛助会員**：年会費　一口50,000円
この法人の目的に賛同し、支援する団体、個人。

会員特典　季刊情報誌の送付
講演会／研修会等への優先参加

※入会ご希望の方は、下記のファックス、お電話、メールにて申し込み用紙をご請求下さい。おり返し資料をお送りいたします。また、ホームページからでも入会申し込みができます。
TEL. 03-6770-1682　FAX. 03-6770-1683
E-mail: jimukyoku@jcpnpo.org
URL:www.jcpnpo.org

※この他にも、随時寄附を受け付けております。下記の郵便振替、あるいは銀行口座をご利用ください。
・**郵便振替**　00120-4-10545　NPO JCP
・**三菱東京UFJ銀行　四谷三丁目支店**
普通預金　3960340
特定非営利活動法人　文化財保存支援機構
理事　三輪嘉六
・**みずほ銀行　根津支店**
普通預金　1727893
特定非営利活動法人　文化財保存支援機構

編集後記

●前号の「保存修復の現場から」には、今まで無かったような反響が寄せられたのには驚きました。今後の励みになります。でも、染織家の間ではどれほど高名な先生なのかを知ったのは、発行後のこと。のほほんと宿に車で送ってもらった私たちって……（汗）。（嶋）

●ついに改正された新しい教育基本法には、「伝統」という言葉が目立ちます。逆に見ればそれほど今の日本では、「伝統」が重んじられていないということ？　でも、「伝統」って一体何？一度じっくり考察してみたいと思っている言葉のひとつです。同時に特徴的なのが「郷土を愛する云々……」という文言。でも日本の自然や芸術をそのまま保全すれば、いやでも好きになるほどきれいな国なんですけどね。ほんとうは……。ま、とりあえず、お正月はお屠蘇とお雑煮で「伝統的」に過ごしましょう。（M.Y.）

NPO　JCP　NEWS
第15号
2007年1月1日発行
特定非営利活動法人　文化財保存支援機構
〒110-0008
台東区池之端4-14-8 ビューハイツ池之端103号
TEL:03-6770-1682　FAX:03-6770-1683
E-mail: jimukyoku@jcpnpo.org
URL: www.jcpnpo.org

〈理　事〉
三輪 嘉六（理事長）
大林 賢太郎（副理事長）
西浦 忠輝（副理事長）
伊原 惠司
白井 久明
増澤 文武
〈事 務 局〉 八木 三香（事務局長）
松本 洋子
〈編集協力〉 嶋根 隆一（伝世舎）